

方向

第一〇九号 一九九〇年一月二五日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

中国の詩人と仏教

一

1990.1.10.

原田憲雄

一、はじめに

『方向』の読者のひとりから「中国の詩人たちは、仏教をどう見ているのだろうか」とたずねられたことがあります。仏教が中国に伝わってから今日までほぼ二千年、そのあいだに活躍した詩人は星の数ほどもいますから、かれらのこの宗教に対する考え方、感じ方、関わり方を、一口でいうことは、とてもできません。そう答えたのですが、むかし「中国の詩人と仏教」を自分の研究題目として掲げたことを思い出しました。

三十年ほど前のことです。文部省が教員の研究について調査し、教員は報告しなければなりませんでした。わたしは、主題を二つにしぼりました。一つは「李賀」、二つが「中国の詩人と仏教」です。

李賀(七二八七)は、わが国の伝教大師や弘法大師が留学したころの唐の詩人で、鬼才とよばれ、特異な作風で知られますが、研究者はまだ少なかつたのです。この人については、重箱の隅をつつくように、徹底して徹視的な検討をめざしました。後に、一部は『李賀論考』という本にまとめ、一部は『李賀研究』という個人雑誌に発表しました。

二つめの「中国の詩人と仏教」は、「中国の詩人」と「仏教」の対応をおおまかに、巨視的な視野で捉えてみ

たいということですが、この題目の論文は書かずじまいでしたが、研究しなかったのではありません。李賀はもとより、他の詩人についても、つねに仏教との関連に注意し、気づいたことはその時々記してきたのですが、一人びとりの詩人、一首々々の作品の検討に時間をとられ、それらを見通して大きな枠組みをえがくことができなかったのです。今でも力にあまることですが、これまでに感じたこと、気づいたことをぼつぼつお話しする、おひまな方が聞いてくださる、といったことなら、できないこともなさそうですので、この連載をはじめます。話しがあちらに飛んだり、こちらにそれたりして、系統だったことにはなりそうにありませんが、あらかじめお許しをねがっておきます。

二、ホトケさまがやってきた

仏教は、インドでお釈迦さまの開かれた宗教です。お釈迦さまは、「世尊」とか「ゴータマ・ブッダ」とか、いろいろの呼び方がありますが、ここでは「釈尊」とよぶことにします。釈尊はいつごろの人か、といいますが、あまりはつきりしないのです。インドは早くから知識の発達した土地ですが、そこに住む人たちは、個々の事実を記録することあまり興味をもたなかったのです。土地の歴史もおぼろげで、ちかごろやつと、そのさつとした輪郭が知られてきたにすぎず、釈尊についてもよくは分らないのです。しかし通説によれば、西暦紀元前五世紀に、北インドからネパールにおよぶ地方にあったシャカ族の国に生れ、出家して、中インドのガンジス河沿岸のマガダ国で修行し、三十五歳でブッダ（覚った人）としての自覚に到達しました。この自覚を「不死をさつた」とも「苦より解脱する道を発見した」ともいい、その真実を人々に伝えて、八十歳でこの世を去ったよう

す。年代を示すのに種々の方法がありましようが、ここでは西暦によることにします。

さて、仏教が中国に伝わったのは、紀元前後のことと思われまゝ。中国は、インドと違って、事実を重んじ、記録を作り、保存することに熱心でしたが、その反面、怪しげな資料もたくさん作られました。仏教伝来の時期についてもいろいろの説があります。孔子がすでに釈尊のことを知っていたとか、秦の始皇帝のとき沙門が經典をもってやって来たが、皇帝が禁止した、とかいうのがそれです。「沙門」とはインドの諸宗教の出家修行者を指すことばを音写したのですが、中国では仏教の僧の呼び方となりました。孔子の伝記も分らないところが多いのですが、前六一五世紀の人でしょうから、釈尊より早く死んだはずで、始皇帝のことは、伝える資料が信用できないのです。これらの中で、確かな資料が伝えるものとして有名な二つの話をつぎに紹介しましょう。

一つは、前二年のことです。漢の哀帝の朝廷にやってきた大月氏（だいげつし）国の使者の伊存が「浮屠（ふと）経」を漢の学者の景盧に口うつしに伝えた。經典の教祖はブツダ（復立（復豆））である、というのです。この話を伝えるのは『三国志』の注に引用された魏の魚豢（ぎょかん）の『魏略』で、信用度の高いものです。

「大月氏」とは、中央アジアのアム河流域にトルコ系の月氏族が建てた国で、配下に五部族がありました。そのひとつのクシャン（貴霜）が強くなり、紀元前後にとつてかわります。中国では、クシャンも大月氏とよびましたから、ここでの大月氏がクシャンかそれ以前のものかは分かりません。いずれにしても話はこれだけで、「浮屠経」がさらに研究されたようでもなく、まして信じる人ができたようでもありません。しかし、この伝えが事実とすれば、インド語の「ブツダ」が伝えられると、中国では「復豆」あるいは「浮屠」などという音写形

式で表記されたことが知られ、日本で「ほとけ」というのがやはり「ブツダ」の音写であることも思いあわされ
ます。

二つは、五〇年前後に、後漢の皇族の一人が佛教信者になっていたという事実です。この皇族は、初代光武帝
と許氏の間でできた子で、二代明帝の異母弟であり、四一年に楚王となった劉英です。光武の許氏に対する愛が
うすかったため、英に与えられた国は、兄弟中もつとも貧弱でした。それで不平も大きかったのでしょう。若い
時には、やくざきどりや、人を集めて騒ぐようなこともあったようです。明帝とは、その太子時代から仲がよく、
即位した帝は英を優遇しました。権力者とその親族というのは、肉親であっても、お家騒動の種が尽きず、取り
巻きの策謀もあり、ぶっそうな噂が絶えないものです。英についても反逆の計画があるといった噂が飛んだので
しょう。六五年、明帝は「死刑にあたるような罪のあるものでも、絹布を献上して償うことができる」というみ
ことのりを出しました。このとき英はみずから、担当大臣の処に出頭し、「地方行政を依託されながら、過ちを
重ねておりますのに、天子のご恩をこうむり、感謝にたえません」といって、絹三十匹をさしました。大臣
が報告しますと、明帝は「楚王は、黄帝（こうてい）や老子のことばを誦え、浮屠釈迦牟尼の祠を尊ぶひとだ。
その彼が三カ月も潔斎して神に誓ったことばに、疑う余地があるか」といって許し、そのことを公布し、絹は
「伊蒲塞・桑門」への供養にしろと、返してやったのです。「伊蒲塞」は優婆塞とおなじで男の信者、「桑
門」は沙門とおなじです。

『後漢書』の記すこの話から、一世紀のなかごろにはすでに佛教がたしかに中国に入り、一部の貴族に信じら

れ、仏廟ができ、それに奉仕する僧俗の徒がいて、礼拝の儀式や、供養の齋食といった行事のおこなわれていたことが察せられます。

「黄帝や老子のことばを誦え」というのは、「黄老（こうろう）の術」、のちに「道教（とうきょう）」といわれるようになる民間信仰の修行法のひとつで、道教は、不老長寿などの現世利益を約束する宗教です。黄帝は伝説上の古代皇帝、老子は思想家ですが、これも伝説的な人物で、いま残っている『老子』という書物と、関わりがあるかどうかよくわかりません。『老子』は、後に編集された道教の經典のなかに編入されましたが、その思想と、宗教としての道教と、どれだけ関わるかも、はっきりしているとはいえないのです。しかし前三世紀の終わりのころから、老子や荘子の思想を受けつく一派、これを「道家（どうか）」といいます。かれらがその學術に權威をつけるために黄帝の名をかつぎだしたようです。道家は、自然であることと自由放任を主義の中心においていましたので、秦が滅び、漢がこれにかわった前二〇〇年ころから約八十年間は、おおいに流行したのですが、武帝という皇帝が、儒者を宰相とし、儒教を国教とし、太学において儒教を研究させ、太学生の中からは官吏を任命することにしたので、神仙術すなわち仙人になって永遠の生命を獲得する方法、丹砂の法すなわち錬金術、その他もろもろの俗信をとりいれて宗教化したのが黄老であり、その行者を方士とか道士といい、役人の世界から締めだされた方士たちが、民衆の心を導いたのです。もっとも、不老長生はだれにとっても願いでしょうから、儒教がいのある思想を祭じた武帝じしんが、後には方士を近づけ、だまされ続けても、その迷いから醒めませんでした。

黄老の信者の楚王が、同時に佛教の信者でもある、というのは、キリスト教やイスラム教を奉じる人々には理解しにくいでしょうが、試験前には神社に絵馬を供え、大学にはいったら無神論者になって鉄パイプを振り、神前結婚して、仏式の葬儀で一生を終わる、融通無礙の日本人には、なんの疑問もないでしょう。楚王の信仰も、ご利益があれば何でもよかったのかもしれませんが、他の人たちにさきがけて異国の神ブツダを信じた、というところが、現代の多くの日本人とは差異のある先進性でしょうか。

この事件は、楚王英という中国の個人が佛教を信じたという事件を伝えるだけでなく、実にさまざまのことを物語っています。

一つは、中国の歴史の性格についてです。わたしは先に「確実な資料」といいましたが、それは中国の歴史家の常識に従って官製の歴史書を指したのです。これを「正史」といいます。正史またはそれに準ずる書物に記載されたものは「確実な資料」と見なすのです。ところで楚王の事件についての書き方を見ますと、この事件に明帝という皇帝がいかに賢明に対処したか、弟思いであったか、というところに重点のおかれているのが分かるでしょう。そうして「浮屠」「桑門」などのことばは出てきても、それがなにもので、いかなる宗教であるか、といった説明が、本文にはないのです（いまある注は、後の人が加えた物です）。歴史を書く人たちから見て、それらのひとは、書くに値しない事だったからです。中国人には、昔から中華思想というのがありました。中国が世界の中央にあり、漢民族が人間のなかでもっとも尊く、漢民族の考え方や感じ方がもっとも正しい、漢民族以外は野蛮人だ、といった思想で、だから漢民族以外をよぶのに、つい先頃まで、けものへんや、よくない意味の

文字を当てていたのです。だから外国の宗教、その伝道者などには興味も関心もすく、たまたま皇帝の弟と関わりをもったので、やむなく記録したにすぎないのです。このような中華思想は、中国を研究する他の国の学者にもうつっていることがあります。

話しをもとすと、漢代の制度は、以後二千年、清朝にいたるまでの中国国家の典型となりました。そこでは知識人が官僚であり、官僚が皇帝の手足となって政治と経済を支配しました。だから皇帝と官僚の動向が歴史にとりあげられる主題で、人民は税金をおさめる道具のように考えられ、人民の個々の生活などはほとんど歴史家の視野にはいらず、たまたま悪政に反対して人民が立ち上がると、その人民を「賊」とよび、その行動を「暴動」として記録したのです。まあそういった次第で、かれらのイデオロギーによる儒教の祭りは決まり切ったようなことまで繰り返し記録しても、民衆の信仰や、外来の宗教については、皇帝と官僚たちに関わってくるとき以外は、記録しませんでした。だから正史に記録していかないから「無かった」とはいいきれず、「記録されない事柄」は記録されたものよりずっと多かったです。皇帝や官僚に関わることで、権力に都合の悪いことは、記録されず、いったん記録されても抹殺されることのあるのは、これは古今東西をとわぬ一般事です。「確かな資料」がかならずしも「確か」でないことを、わたしたちはたえず心に留めておく必要があります。

楚王の記事は簡単なものですが、しかしここからいろいろなことが読み取れます。当時の中国人はブッダを、方士たちのいう黄帝や老子のような「神仙」に似たものと感じていたろうこと。すでに洛陽の都以外にも佛教徒がかなり増え、祠廟を設け、礼拝や潔斎の儀式が行なわれ、出家や非出家の奉仕者がいたこと。明帝が楚王に対

する処置を公布したことによって、佛教を信じること、伝道することが、国家によって許され、善事として奨励される結果となったこと。楚王をみちびいた僧は、中央アジアを通過してやってきた人でしようから、いわゆるシルクロード周辺の国々では、中国以上に佛教が知られ、信じられつつあったろうこと。などです。

三、詩人科学者・張衡

わたしの恋しいこいしいひとは 太山(たいざん)にいらっしゃる

我所思兮在太山

行ってお仕えしたくはあるが 梁父(りょうふ)のけわしさ

欲往從之梁父艱

身をひそめ 東のぞめば 涙が袖を濡らします

側身東望涕霑翰

うつくしいあのひとが わたしに贈ってくれたのは 黄金の太刀

美人贈我金錯刀

なにお返しにしたものか そうだ 赤い宝玉がいい

何以報之英瓊瑤

でも路が速くって届けもできず ただうろろとするばかり

路遠莫致倚道遥

どうしてこんなになしくも 苦勞をせねばならないのか

何為懷憂心煩勞

これは張衡(ちやうこう) 其(二三九)の「四愁詩」という四首連作の詩の第一首です。第二首以下も部分的に言葉がすこし違うだけですから省略します。同じような内容を繰り返すのは、現代の詩法からいうと無駄なように見えましようが、中国最古の詩集『詩経』にはたくさんあり、インドのパラモン教や佛教の經典にも多く、古い口誦文学ではむしろ一般的なのです。口で歌い耳で聞くのですから、意味がくるくるかわると聞く方ではわかりにくい。同じ内容が繰り返されながら、けじめけじめで言葉が違うのがおもしろく、次第に興が高まってゆくので

す。「四愁詩」は、黄河沿岸に發達した『詩經』を本歌としていますが、長江（揚子江）沿岸に發生した楚辭の形式もとりいれ、一句七字の詩としても初期のもので、文学史でことに注目されるものです。

作者張衡は、字（あざな）を平子（へいし）といい、荊州南陽郡（今の河南省南陽）の人です。十代の後半に前漢の都であった長安、後漢の都洛陽で学び、三十代後半に太史令（たいしれい）という天文や曆法を扱う役所の長官となり、「渾天儀（こんてんぎ）」という天文觀測機や、「地動儀」という世界で最初の地震觀測装置を發明しました。かれの觀測所である「靈台」の遺蹟が、一九七四年、河南省偃氏（えんし）県で發掘されたということですが、才能のある人は妬みをうけやすく、かれも人に憎まれ地方官になり、「四愁詩」はそのとき作ったもので、後の人がこの詩にそえた序文に「むかし屈原（くつげん）が美人を君子にたとえ、珍宝を仁義にたとえ、水の深く雪の降るのを小人にたとえた文章にならって作ったのだ」といっています。屈原は楚の人で、その作品は楚辭の代表的なものです。張衡は地方官としてもすぐれた仕事をし、ふたたび中央にかえり、六十二歳でなくなりました。この詩もりっぱですが、かれは文学者としては「賦」という文体の作者として有名なのです。

賦は、古代の散文と楚辭とを混ぜ合わせたような形式の美文で、これが前・後漢を通じての代表的な文学です。張衡には「西京賦」「東京賦」「南都賦」「思玄賦」などがあり、いずれも『文選（もんぜん）』に収められています。ことに「西京賦」と「東京賦」はそれぞれ『文選』の第二巻と第三巻を占める大作で、十年の歳月をかけて書いたのだそうです。二つは対になっていて、「西京賦」で憑虚公子というインテリが前漢の都長安の豪華絢爛を吹聴すると、安処先生という隱者が「東京賦」で後漢の都洛陽の質素朴実をたたえるという筋立てです。

当時の洛陽は、いのように質朴であったわけでもないようですが、奢侈贅沢にむかおうとする時代の人々に諷刺して反省させたい、というのが作者の意図だったのでしよう。

「人間だれでも春や夏の陽気な時季にはたのしみ、秋や冬の陰気な季節にはかなしむ。肥えた土地では楽だが、瘦せた土地では苦勞する。境遇は人を左右し、土地は政治に影響する」といった前置きのあと、公子は長安の山川、宮殿、官衝、市場、鳥獸、虫魚にいたるまでを、あらゆる古典から掻きあつめてきた目もくらむような文字群で描写します。そうして、天子の愛する美姫を述べるところに、次ぎの句がみえます。

「昭藐（べいびょう）流眇（りゅうへん）すれば、一顧して城（まち）を傾く。展季（てんき）桑門も、誰かよく營（まど）わざらん。」

「昭藐」は、目もとの涼しい美人、「流眇」は、ながしめ。美人が一度ウイंकをすれば町中が大騒動になる。それが「一顧して城を傾く」です。「展季」は、前七世紀の魯の賢人で、柳下惠（りゅうかけい）という呼び名で知られ、いろいろエピソードがあります。そのひとつ。冬の夜、凍えながら門前にたたずんだ女性を、中に入れて暖めてやったが、かれを疑ったり、非難する者がなかった、というのです。そんな展季でも、桑門すなわち佛教の沙門でも、惑わずにはいまい、とはもちろん長安の美姫の魅力をいうのですが、これは誇張表現です。反面からいえば、当時の社会では、佛教の僧はけっして女色に迷わない、という点で、中国の柳下惠に匹敵する存在と認められ、張衡もこれを是認していたということでしょう。それはまた、文学作品に譬喩として通用するほど、僧の数が多くなり、佛教が普及しつつあったことを、示唆しているのではないのでしょうか。

念仏には会い難し

1930. 1. 13.

原 田 慶

祈りは他人に見せようとしてするものではないから、人の祈るのを覗きみようとしても、思いのほかに出会い難いものである。

京都の東山区にある六波羅蜜寺（ろくはらみつじ）では、毎年十二月十三日から三十日まで、空也の踊り念仏が行なわれる。公開されていると聞いたので行ってみようと思っていた。いよいよ暮れ近く、念仏が始まり、十日の新聞に写真入りで紹介される。

：六波羅蜜寺（川崎龍性住職）で十三日、かくれ念仏として知られる師走の恒例行事・空也湧躍（ゆやく）念仏が始まった。：住職が導師となり、他の三人の僧が「金鼓」と呼ばれるカネを打ち鳴らす。本尊・一面観音像が安置されている本堂内陣で「南無阿弥陀仏」を意味する「ノーボー オミトー」や「モーダナンマイト」を唱え、内陣の周りを何度も回り続け、きびしい行を繰り返すもの。

と書かれている。十八日間も行なわれるのだから、その中で一度くらいは行けるだろうと思っているうちに、一週間が過ぎて、二十日になった。どうしても行かなくてはと思い立ち、四時から始まるというので、二時ころに出かけた。バスで四十分ほどで四条大橋に着き、祇園の街を通り抜けてみた。昼間はがらんとして人通りも少なく、なんの情緒もないが、それでも垢ぬけたお茶屋に巾広の暖簾が掛かっていて、白いうわっぱりの男の人がそれをくぐって出てきた。料理を運んで来たのだろうか、ちらっと中のたたきが見えた。臨濟宗本山の建仁寺に突

き当たったので、東へ折れて上がって行くと、右手奥に安井神社があり、舞妓さんのすがたがみえる。雑誌の取材か何かだろうか、写真を撮っているのだった。子どものようにほっそりした小柄な二人で、とても寒そうな様子をしていた。

家がいっぱいに建て込んでいて、道が迷路のようなので、またすこし下がって建仁寺を南へ抜けた町筋を珍皇寺へいった。「ちんのうじ」あるいは「ちんこうじ」といい、ここが精霊迎えの小野篁（おののたかむら）の寺である。人けのない白々とした境内で、石屋の職人さんが五人ほど、大きな水子地藏尊を立てている。えんま堂をのぞいてみると、こわい顔のえんまさんと、端麗な篁の像が並んでいる。ずいぶん大きく見えた。隣の鐘つき堂をのぞくと、これも大きな鐘で、引き綱が床下を通って板戸の穴から端を出してある。これが精霊迎えの鐘だなど思ってもよっと引いたが動かなかった。止めてあるのかもしれない。正月も近いというのに、精霊を迎えにくる人はいない。

寺の前が松原通りで、東へ上がると清水坂。そこをすこし西へ下がると、六道の辻に出た。丁字路の角に、もとは地藏堂だったといわれる西福寺（さいふくじ）がある。低いくぐりを入ると、湿っぽい狭い一郭があり、小さな不動さんや地藏さんをたくさん祀っている。この寺には弘法大師作の地藏尊があり、嵯峨天皇の檀林皇后が帰依されたことが、本堂の軒下に絵入りで説明されている。また「九想観の図」という掛軸があつて、これは檀林皇后が、自分が死んだらそのまま中野に捨てよ、色欲に耽る者は、わが爛穢（らんえ）を見て、少しく警悟することあらん、と言ひ遣されたので、屍を棄て、それが腐乱してゆく順をえがいた図だそうである。想像すると

気持ちが変わるので、このお寺に入るとつい足音をたてないように気をつける。向かい側にえんま堂があったのだそうだけれど、今は家が建っていて、何のしるしもない。また西に下がって愛宕（おたぎ）念仏寺の址には、白い塔のような建物があるだけで、念仏寺は清滝に移っている。もうすこし下がって姥堂の址にも何も残っていない。しかしこのあたりは鳥辺野の葬場の入り口だったのだそうである。今は隙間もなく家が建って、すっかり人が住み馴らしている。

西福寺の丁字路を南へ行くと六波羅小学校で、隣りあって六波羅蜜寺がある。寄り道をしながら来て、四時すこし前に六波羅蜜寺に入った。お参りの人もなく、念仏など始まる気配はない。本堂に上がって、ろうそくを供えて拝んだ。受付に行つて、宝物館の入場券を買い、有名な空也像を見た。写真ではよく見ているので、初めてのような気がしない。細いからだに、形よく後へ張つたような頭、なにを見ているのか不思議な目、口から南無阿弥陀仏の六体の化仏が出ている。胸に金鼓を掛け、右手に撞木、左手に鹿の角をつけた杖を持つ。膝から下を出した細い脚には、無駄なものをこそげ落として、どこまでも歩き続けようとする強さと美しさを感じる。この宝物館には、ほかに薬師如来、かつらかけ地藏尊、平清盛、弘法大師、運慶、湛慶などの坐像がずらっと並んでいる。平清盛の像は、写真で見た時より、いくらか耳が寂しい感じがした。

六波羅蜜寺のことをしらべてみると、踊り念仏の祖とされる空也上人が、天曆五年（九五）に開創し、応和三年（九六）に落慶法要が営まれたといい、その時には西光寺（さいこうじ）といったそうである。後に、弟子の中信上人が規模をひろげ、天台別院として栄え、六波羅蜜寺と改められた。たいへん広い寺域をもち、いまの五条通

りを越えて、七条の京都国立博物館のあたりまで広がっていたらしい。平安後期に平忠盛が、ここに邸を構え、平家一門の五千二百余りの住居があったという。平家没落のとき、この広い境内にあった地藏堂、姥堂、えんま堂など、みんな焼けてしまい、本堂だけ残った。そのうち、源頼朝、足利義詮、豊臣秀吉などによって補修され、昭和四十四年に開創一千年を記念して解体修理が行なわれた。その時のことにつき、今東光氏が『空也の寺・六波羅蜜寺』（淡交社刊）に次のようにいう。

：川崎住職が苦心して修理された時、はからずも古の遺構を発掘した。それは今までのやうな板敷の堂内ではなく地中から碑（かわら）を敷きつめたのが現れたので、応和三年八月、諸方の名僧六百名を屈請して金字大般経を浄写転讀し、夜におよんでは五大文字を点じて、大万燈会を行った天台宗の六波羅蜜寺の昔の姿を髣髴せしめ、あたかも根本中堂に似た構造であることが知られたのである。

修理されたのは川崎龍性師だが、今氏が中学三年の頃、初めてこの寺に行った時には、朽ち果てて見る影もない荒れ寺だったと書いておられる。現在の美しい本堂からは想像もできないが、この本堂が古い歴史をもっていること、近年に修理されたことは、誰にも感じることができるといえる。

いまでは民家がすぐ近くまで建って、通りと境内はわずかに柵でしきられ、手の届きそうなところに本堂が真正面を向いているから驚く。広い境内が陣取りのように削られていったのだろうか。法要の時などには、柵の扉が中央と左右三カ所あけられると、お参りの人があふれ出して、道と境内が一つになったようなのがおもしろい。宝物館を出てくると、本堂に寺務の男の人がおられた。

「踊り念仏が行われていると聞いたのですが、今日はまだでしょうか」とたずねると、

「ああ、ずっと三十日まであるんですが、今日は用事で、おしろうさんが出掛けてますので、始まるのが五時以後になります。五時には門がしまりますので、今日は一般の人には見てもらえせんわ。三十日までずっとありますさかいに、また来てください、近くから来はったんですやろ」

「はい、近いのです」

「そんならまた来てください。あしたも、あさってもあります。ちょうど悪い日に来はりましたな。たまたま今日は見られへんのです」

「そうですか、新聞に『かくれ念仏』と書いてありましたけど、どうして『かくれ念仏』というのでしょうか」
「それは、昔は仏教というものは貴族のもので、一般の人は仏教なんて、関係なかった、何も知らなんだんですわ。それを空也上人が、町の中へはいつて念仏を教えはったのです。人が大勢集まると、何かやうない相談でもしてるのと違つかというので、政府から取り締まられたんです。しようがないので、隠れて念仏を唱えたいんです。くわしいことは、また、おしろうさんにたずねてください」

「ああそうですか、どうもありがとうございました」

「はいさいなら」

そういえば『京都の町衆と仏教』という話しを聞いた時に『かくれ日蓮』ということがあった。いつの時代でも権力者に都合の悪いことは弾圧を受けるものである。

せつかく来たのに念仏に会えなかったけれど、宝物館を見ることができたからと自分をなぐさめて寺を出た。うす暗くなった町で、アルバイトの女の子が、まだ郵便配達をしている。宛先がなかなか分からなくて苦勞しているらしい。このあたりは轆轤町というが、江戸初期に町名が変るまでは鶺鴒町だったそうである。今のこともなら『ゲゲゲの鬼太郎』などを思い出して「夜は墓場で運動会、うれしいな、楽しいな」と歌ってしまいかもしれないけれど、まじめに考えるとやっぱりぞっとする。

家に帰ると、ちようどそんな日に出かけて行くなんて、よっぽど運が悪いと笑われた。それからまた二十三日に出かけた。今度こそと思っていたが、天皇誕生日で翌日が日曜の連休になり、一日早くクリスマス気分が人々が町へ繰り出し、バスが動かなくなってしまった。四十分もあれば着くところを一時間と二十分かかった。四条大橋で降りて二キロくらいだろうか、大和大路を走って行ったが、ちようど終って燈明を消しておられるところだった。お堂に上がって拝んで、寺務の人にもっとおじぎをしたら、「はい、ようおまいり」と大きな聲で言われた。元気のいい人だ。また見られなかったのがっかりしながら、夕暮れの鴨川を松原橋で渡った。さすがに、河原には誰もいない。高瀬川に沿って四条まで歩いた。忘年会の歓迎の札を出している料理屋があったりするが、まだこのあたりの町はひっそりしている。四条まで歩いて、クリスマスチョコレートを買って帰ってきた。今度はさすがに家でもあきれられてしまった。主人などはもう、なさけないというような顔をしてわたしを見ている。娘が「それでお母さんまた行くつもり」とたずねるので「行く行く、まだ一週間もあるんやで」と元氣よくいうと「まあ三度めの正直ということもあるからねえ」と言った。主人は「あんたはよっぽど――、ぼく

なら二回も行ってだめやったらあきらめて、これはもう一年修行してから来いということなんやろ、とおもうけどなあ」という。わたしは心の中で「あーあ、わたしは努力をしてるんやけど分かってもらえへんのかなあ、来年になって必ず行けるかどうかからへんのに」と思い、てれかくしに、ひとりで笑っていた。

あと一週間で今年も終りとなれば、やはり慌ただしい。ほんとうに行けるかなあと危ぶみながら、最後のチャンスを作るためにばたばたして、二十七日にやっと時間がとれた。こんどは混雑する四条通りを避けて、京阪電車の三条駅までゆくバスに乗った。ぶじに行き着き、縄手筋を歩いて南座の前に出た。この通りも新旧入り混じった町で、骨董屋さんが何軒もあるが新しいビルもある。四条通りを渡って、大和大路をせつせと急ぎ、家から一時間たらずで六波羅蜜寺に着いた。まず本堂を拝み、すこし早いので、轆轤町を歩き、三昧聖と願人坊の寺庵だったという宝福寺をさがしてみたが、見つからなかった。車を押して歩いていたらお年寄りにたずねると、ホホと笑って、ちよつと首を傾げてから、

「あかん年寄りな、わたしはなんにも知らんです。たしかそつちへ行った角にも一つお寺がありますけど、何というお寺ですやろ、そこらへんで、もういつべん尋ねてみとくれやす。ほんまにあきまへんな」と言われたので、誰でも知っているとはかぎらないものを、気やすくたずねて済まないことをしてしまったと恥ずかしかった。お礼をいって六波羅蜜寺へ引き返し、本堂に上がると、大学生らしい女のひとが二人、内陣と外陣を仕切る格子の傍に立っていた。四時すこし前になって、みどりの衣に赤い金襴の袈裟をつけた導師と、首に鉦鼓をきげた黄土色の衣の僧が四人、いっしょに内陣にはいられた。やっとなり念仏が見られると思うとわたし

はうれしくて、緊張した。

内陣は外陣よりずっと低い土間である。須弥壇の上には厨子が三つあって、中央が本尊の十一面観音、右が地藏菩薩、左が薬師如来。お廚子の扉は閉まっている。観音さんの前の護摩壇の座に導師が着かれると、他の僧は二人ずつ導師を中にして向きあって立たれる。お経が始まった。導師が唱え、それから皆で唱和するというようにして進んでゆくと、鉦をさげた四人の僧が、腰をかめたり伸ばしたりして鉦を打ち、護摩壇の周りを、右にゆっくり回りはじめ。何度かまわり、もとの位置に戻ると、止まって唱和し、四股を踏むようなかっこうで片足ずつ上げて踊りながら鉦を打つ。またしばらくして、鉦を打ちながらお経を唱えてまわる。これを四回くらい繰り返して、急に四人の僧が、脇陣から扉をあけて後陣へ出てゆかれた。これで終わりかと思ったら、しばらくしてまた出てきて、同じように踊りながらお経を唱える。二十分余りで終わった。それほど激しいものではなく、むしろ静かで儀式的な感じがした。内陣は暗くてろうそくの灯が赤くともり、格子を通して外からのぞいていると、別の世界を見ているように幻想的だった。最後に唱えられたことばが「南無大師遍照金剛、南無開山空也上人」までわかったけれど、そのあとが聞きとれない。ずっとノートをとっていた学生さんに尋ねてみたが、よく分からないらしかった。あとでお寺の方に教えていただいたところでは「南無本尊界会、南無両部界会」だそうである。「両部」は金剛界と胎藏界のことだと説明された。「界会」は、辞典で調べたら「かいえ」とよみ、「一つの領域に属するものがすべて集まること」だと書いてあった。

ようやく念仏に出会うことができたので、うれしくて、それからどうして家に帰ってきたのか、よく思い出す

ことができない。お寺の宝物館の入場券に、

空也上人は「彼を先とし吾を後とする情（こころ）を情とする」と説かれました。即ち無限に変化して行く過程で瞬時のためらいも停止も許されない厳しさで、六波羅蜜の行動を教えておられるのです。

と書いてある。むつかしいのでよくわからないけれど、五来重『日本人の仏教史』などから空也上人というひとを見ると、ほんとうに慈悲に生きた人だということが分かる。

空也上人（五〇〇九七〇）は平安中期の人。若いころから日本国中を巡り、はげしい修行をするかたわら、道路や橋を修理し、井戸を掘り、野に捨てられた死体に供養した。古代には、死への恐れと、穢れの觀念が強くと、庶民は野辺に捨てられた。だから広い野原の墓地には風葬死体や骸骨がゴロゴロしていた。空也上人はそれを放置するにしのびず、死体を集めて火葬し、清らかな白骨として葬り、阿弥陀仏の加護によって極楽に救いとらせようとしたのだそうである。五来さんは、常に民衆の中にあつて教化し、体制側に立たなかつた空也上人のことを、

：空也の評判は褒貶相半ばしたであろうとおもう。民衆に交り、民衆の味方をするものは、時代にはあまりむかえられない。民衆自身が軽んずるのである。

と書いておられる。そうだろうなという気がする。わたしたちは、身近かなひと、ほんとうの自分の味方であるひとほど、その人の良さに気がつかず、肩書きや世間の評価に気をとられがちだということを反省する。ともかくも、このように身を捨てて人々への愛に生きた人があつたことは、ほんとうに有難いと思うし、それを今に守り、また語り伝えておられる人のあることは、わたしたちにとって何よりの幸せだと思ふ。

3-8. さて、長老シャーリプトらは、世尊にこういった――

わたしには疑いはなくなり、世尊よ、惑いから離れました。世尊の前で、じかに、自分の無上の正しい覺りを授けられたのを聞いて。世尊よ、これら千二百人の自在の者を、世尊は、かつて「修学者」の段階に位置づけ、次ぎのように語り、教えられました、「わたしの法と律とは、ピクたちよ、生・老・病・死の苦惱を超えて、涅槃に達することを、究竟とする」と。そして世尊よ、まだ「修学者」である者や「修了者」の、二千のピクがいます、世尊の弟子たちのなかに。かれらはすべて、我見や生滅の見など、すべての邪見から離れ、涅槃の境地に安住したと考えていました。ところが世尊の前で、このようないまだかつて耳にしたこともない教えを聞いたので、疑惑に陥りました。だからどうか、世尊よ、お話しください、これらピクたちの疑いを解くために。また、世尊よ、ここにいる四衆が疑いから離れ、惑いがなくなるために。

atha khalv āyusmān śāripuṭṭro bhagavantam etad avocāt /
niskāṅkso' smi bhagavan vigata-kalham-
katho bhagavato 'ntikāl sammukham idam ātmano vyākaraṇam śrutvā' nultarāyāṃ samyak-sambodham /
yāni cemāni bhagavan dvādaśa vaṣṭi-bhūta-śātāni bhagavatā pūrvam śaiksa-bhūtau sthāpitāny evam
avavadi tāny evam anuśiṣṭāny abhūvan/ etat-parjayaśāno me bhikṣavo dharmā-vinayo yad idam jāli-

jarā-vyādhi-marāṇa-śoka-samatikramo nirvāṇa-samavasaraṇaḥ / ime ca bhagavan dve bhikṣu-sahasre
śaikṣāśaikṣāṇāṃ bhagavataḥ śrāvakāṇāṃ sarveṣāṃ āma-dṛṣṭi- (W :-bhava-dṛṣṭi) -vibhava-dṛṣṭi-sa-
rva-dṛṣṭi-vivarjitānāṃ nirvāṇa-bhūmi-sbhītā (W :sthitāḥ) sma ity ātmanah samjānatām te bhagavato
* nlikād imam evaṃ-rūpaṃ aśruta-pūrvam dharamaṃ śrutvā kathankalām āpannāḥ / tat sādhu bhagavān
bhāṣalām eṣāṃ bhikṣūṇāṃ kaukṛtya-vinodanārtham yathā bhagavann etās calasraḥ parsado niṣkāṅkṣā
nirvicikitsā bhaveyuh ॥

「修学者」と訳したのは、まだ学ぶ余地のある者のことで、漢訳では「学」「有学」「学地」などとし、アラカン以前の一切の聖者を指し、これらはまだ煩惱がなくなっていない者である。「修了者」と訳したのは、すでに学行を極め、もはや学ぶべきものを残していない境地に到達した者を指し、漢訳では「無学」「無学位」などとし、アラカンあるいは仏を指す。学・無学にしても、修学者・修了者にしても、いまの日本語の語感とは離れる。現代の日本人は外国語のカタカナ表記が好きだが、梵語の音写ではやはり通りにくく、ある程度の無理はやむをえない。

3-9. こう言われて、世尊は長老シャリープトラにつきのように入った――

あなたのために、わたしは、シャリープトラよ、前に示したではないか、世尊・尊敬すべき・正しく覺つたひとは、衆生がさまざまに信解し、いろいろの素質や考え方をもつことを知り、起因を種々に説明し、いろいろの因縁・譬喩・根拠・解釈・巧みな方便により、法を説くと。それら一切の説法は、無上の正し

い覺りについて、ホサツ乘を勧めるためにこそなされたのだ。さてしかし、シャーリプトラよ、譬え話をあなたにしよう、この意味をさらに広く開示するために。なぜなら、知識のある者は、譬喩によって、語られた意味をさとするものだから。

evam ukte bhagavān āyusmantam śārīpūtram etad avocāt / manu te mayā śārīpūtra pūrvam evākhātām
yathā nānābhīrāra nirdeśa-vividha-hetu-kāraṇa-nīdarśanā-rābhāna-nīrūky-upāya-kausalyair
nānābhīmuktānām satlvānām nānā-dhātū-āsāyanām āsāyam viditvā tathāgato 'rhan samyak-sambuddho
dharmaṁ deśayati / imām evānūtarām samyak-sambodhim ārabhya sarva-dharma-deśanāhir bodhi-sa-
lva-yānam eva samādāpayati / api tu khalu puṇah śārīpūtr' aupamyam te karisyāmi asyavārthasya
bhūyasya mātṛayā saṃdarśanārtham / tat kasya hetoh / upamayehaikatyā vijñā-puruṣā bhāsītasār-
tham ajānanti ॥

3-10. たとえば、シャーリプトラよ、部落でも、村でも、市場でも、住宅地でも、郡部でも、畿内でも、王都でもよい、どこかにひとりの家長がいるとしよう。かれは年だけ、老衰の時期に近づき、富み、財産は多く、資材もゆたかで、その大きな邸宅は、高く、広く、長い間に朽ち傾いていたが、二百、三百、四百、五百もの衆生たちがすんでいて、その家は、ただ一つの門しかなく、草に覆われ、露台はくずれ落ち、柱の根もとは腐敗し、壁も、すだれも、漆喰も、壊れていたとしよう。その家が突然、あちらこちらから大火災につつまれ、燃え上がった。このひとつには五人、十人、あるいは二十人という多くの幼い子らがいたが、

このひとだけが、家から外に逃げ出したとしよう。このとき、シャーリプトラよ、そのひとが、自分の家が大火炎につつまれ、燃え上がるのを見て、恐れ、驚き、震えおののき、こう考えたとしよう。「わたしはこの大火炎にも触れず、焼かれず、すばやく、うまく、燃えている家から、門の外に逃げ出すことができた。しかしわたしの息子たちは、まだ幼い子どもだから、燃えている家のなかで、それぞれのおもちやで遊び戯れ、夢中になっている。この家の燃えていることを知らず、気づかず、さとらず、震えおののくこともない。大火炎に焼かれ、大災害におそわれながら、心に苦痛も感ぜず、外に逃げ出そうとも考えない」と。

tad-yathā 'pi nāma śāriputreṇa syāt kasmiṅś-cid eva grāme vā nagare vā nigame vā janapade vā janapada-pradeśe vā rāstre vā rāja-dhānyā vā grhapatir jīrṇo vṛddho mahalako 'bhyatīta-vayo 'nuprāpta āthyō (W:ādhyō) mahā-dhano mahā-bhogah / mahac cāsya niveśanam bhaved ucchrītaṃ ca viśīrṇaṃ ca cira-kṛtaṃ ca jīrṇaṃ ca dvayor vā trayānāṃ vā caturṇāṃ vā pañcānāṃ vā prāni-śatā-nāṃ āvāsah / eka dvāraṃ ca tan niveśanam bhavel / tṛṇa-samchannaṃ ca bhavel / viśadīta-prasādāṃ ca bhavel / pūli-stambha-mūlaṃ ca bhavel (W:bhavel) / samśīrṇa-kudya-kata-lepanaṃ ca bhavel / tac ca sahasaiva mahatā 'gni-skandhena sarva-pāśvesu sarvāvantāṃ niveśanam pradīptaṃ bhavel / lasya ca purasasya bahavaḥ kumārakāḥ syuḥ pañca vā daśa vā viṃśatir vā sa ca puruṣas lasmān niveśanād bahir nirgatāḥ syāt //

「譬喩品」の前半は、「方便品」を受け、シャーリプトラがやがて仏になるだろうという授記によってこれを補足するものだった。この授記によって「声聞」だったシャーリプトラは「ボサツ」であると認められた。ボサツはその実践において、他のひとのボサツとなることを助けなければならない。現に、シャーリプトラへの授記を見ていた仏弟子たちのなかには、自分もまたボサツとなりうることに疑問を持つ者がいる。かれらの疑問を晴らすことが、シャーリプトラのボサツとしての初めの仕事になった。それで、かさねて釈尊に、さらに教えを説かれるように乞い、釈尊は、譬喩話しによって教えを敷演しようとし、その話しがこれから始まる。『法華経』には譬喩話が多く、主要な七つを挙げて「七喩」といい、さらに二つを加えて「九喩」といい、別にいろいろの譬喩を数えもするが、「譬喩品」での「燃える家」の譬喩話しが最初であり、これを一般に妙本の訳語に従って「火宅喩（かたくのたとえ）」という。

「部落」は一族の居住地、「村」は山や樹木のある処、「市場」は隊商の集まる処、「住宅地」は種族の居住地、「郡部」は高地をふくむ国土、「畿内」は領地、王都は王の住所、をそれぞれ訳したもの。正本は「郡国県邑」、妙本は「国邑聚落」とする。梵文では小さいものから大きなものへと並べられているようである。

この譬喩に出てくる家長は仏を、燃える家は人間世界を、そうしてその家のなかでおもちゃに心を奪われて遊び戯れる幼い子どもたちがわれわれ凡夫を指すのだが、おのれをかえりみて、この譬喩は心に沁む。『つれづれ草』に出てくる賀茂の競べ馬見物での「我等が生死の到来ただ今にもやあらん、それを忘れて物見て暮らす、おろかなることは、なほまさりたるものを」といったときの兼好にも、おなじ感慨があったのであろうか。